

脱サラ探検部
95/10/10

木俣美樹男（山農人 妻稷）	1975年～未来
○創部（1975年5月） ○野外教育セミナー、野外教育シンポジウム、環境教育セミナーをへて、日本環境教育学会の創立（1980年頃から） ○奥多摩町、五日市町、檜原村から大滝村へ；秩父多摩国立公園地域における農山村エコミュージアムの実践（1980年頃から） ○民族植物学の国内フィールド調査 関東山地（1975年から）、北海道（1980年頃から）、甲武信地域（1990年頃から）、紀州山地（1980年頃から）、九州山地（1990年頃から） ○民族植物学の海外フィールド調査 インド・ネパール・パキスタン（1983、1985、1987、1989） 韓国（1985）中央アジア（1993）アメリカ合衆国（1983、1985）	
探検部には今も希望をもっている。人知れず、草を分けて、未知の領域へと歩いていく者が少しはいるからだ。私は一人で、誠実に地＝知の果てまで歩く。孤独を恐れているのは自己の居場所がない。まず一人で歩ける者たちが集って大きな探検計画を実現する。これが大学探検部というものだろう。こんなことを学大探検部でやりたいと願って20年を経た。どこまでできたのだろう。沢山のことを積み重ねてきたことは事実だから、もっと自信を持っても良いと思う。自信を持ってさらに跳べと言いたい。多くの日本人が、何が良いのか、悪いのか価値判断をしないことは、判断できないことよりなさない。日本の近未来を憂えてしまう。しかし、若い人たちに希望を託すしかないじゃないか。たとえそれを託せる相手でないと判っていても・・・、大学って何なんだろう。そして探検とはどんな営み？愚直にも前に向かってヨロヨロと歩くしかないだろう、へたるまで。自分自身が生きていと感じられれば、いかにも格好悪い探検行でよいではないか。自分が自分として生きていと感じることを求めて探検の旅に出るのだと思う。もちろん、生きることと死ぬということは幾つもの意味で人間にとっては表裏一体のことである。旅の意味は幾多の詩人に詠まれたけれども、自分の旅の意味を自分自身で発見せねば楽しくはない。いつまでも夢を食べて生きていきたいと思うのである。だから、脱サラ・出家し、風狂の徒になろうとしているのである。	
〒184小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学附属環境教育実践施設 0423-25-2111内線2925 公務員（脱サラ民族植物学者・在家アニミズム信仰者）	

今から、活きているうちにやろうとしている一大事

山農人 黍稷

「脱サラ」あるいは「出家」を決意してから2年になる。このことは私的な心の中の問題であるから、本来、何もここで探検部のみな様に広く表明することもあるまい。しかしこの2年間、相も変わらず日常の忙しさに区切りを付けられずに、さらに煩悩に輪を掛けて支配されているかのように、身近な友人であるみな様には見えていたことであろう。個人的なことではあるが、責任の取り方として、ここに改めて記させていただく。この2年間は自分のしてきたことへの責任を整理していた年月であったとおきたい。とはいっても責任と義務については今後とも最小限は果たさねばなるまいと思っている。義務をなくさなければ、煩悩からは解放され得ないのだろうが、愚直・愚鈍な小生はこの程度の煩悩は消すことができない。

この2年の間には心を揺るがす多くのことが生じた。もっとも堪えたのは、「育ての親」の祖母よしえと親しい友人二人小林往央氏と小松真木子嬢を相次いで失ったことである。しかし、言い換えれば小生の心に住まう友人が増えたということにもなる。こういうことを感得すると、いよいよ今から活きているうちにやろうとしている一大事へと、余計なものを極力取り落として、向かうしかないと思う。残り少ない時間に自らしたい本質的な事をやっておきたい。なんとかかんとか自らの煩悩をコントロールして、山農人黍稷になることにした。彼は一大事をなす主体者の名というわけで、これから在家アニミズム信仰者を演じるのである。30年近くの昔に、山口品というペンネームも使っていたが、これもすでにこの世にいない大切な心の友人山口修司氏と生母昌子の姓名をもじって借用したものだった。年月を重ねると心の友人が増える。このことは心の外では淋しいことだが、中では暖かいことかもしれない。

正直に言えば小生は修道者であって、実際、日常的にも結果的にきつい修業を積んでもいる。社会分類上の肩書きや社会通念で、大学教授なんていい加減に暮らしているものと、多くの人が思い、なんら尊敬してはいないだろう。一般がどうであろうが、しかし、小生はその肩書きに寄り掛かっているわけではないので、やはり求道者として生きていると考えている。個人の生き方は本人自らの問題であるから人がどのように見るかは問題ではない。このことに関しては、信仰の問題で、個人に帰したい。浮かれた世の中がどうであろうが、あくまで個人の修道である。厳しい修業である研究活動が、他者のためになれば有り難いことである。

青少年の頃に夢見たことを、部分的には変形しながらも実現するように努めてきたが、これからはもっと真っすぐに夢に向かって熱中したいと思う。夢というのは、シュバイツァー博士のようにアジア・アフリカの地でボランティア活動をすることであった。このことがそんなに単純なことではないということを今は知っているが、阪本龍馬大兄の海援隊のよ

うなものをつくってボランティア活動をやってみたいとは思ってきた。小生にとって学大探検部は実はそれであってほしかったのである。小西司氏がガーナにいくとき、現在ベトナムに行っているが、彼の活動に対しても、何もできなかったのが残念だ。INCHにはまだ力がない。

これから小生の生き方として、環境教育という方法論をさらに焦点化して脱サラ民族植物学者として何をやっておくか、何ができるかおおよそ見えてきている。持ち時間と能力からしていかにほどもではしないが、前に向かって歩く。先人から受け継いだ栽培植物は、橋渡しをして、絶やす事無く次世代に受け継ぐ、このことを愚直にやりたい。脱サラの意味は自己の名誉は大事にするが、世俗の名声とは縁をもたないということである。大学人の誇り世に迎合しない、つまりは清貧の学者を演じることである。まあ、人生劇場である。

さて、自らへの説法はこれくらいにして、これからどんな探検行を計画しているかを話したい。アフロユーラシアの範囲で活動を続ける。アフリカへも行きたいが、大筋ではインドから南東へ向かって、アッサムからインドシナ半島、さらにスダ列島を進みたい。一方、インドから北東へ向かって、トルキスタンからモンゴル、シベリアへと行ってみたい。双方の政府の許可が得られれば、1996年には5度目のインド行である。この際には、ヒマチャルプラデシュやアッサム周辺諸州に行くことを試みたい。グジャラートやケララへも行きたい。せめてヒンディーの片言でも覚えておこう。この他に、2つの海外調査研究費を申請していて、運が良ければ、いずれ上の大筋に向かって旅行に行けると思う。今までほとんど旅行記を書いていない。じっくり読書や思索もして、おもしろい本を自家製で作ろうと考えている。

こんなことで、今は環境教育についての講演や講義などはほとんど断っている。今までお世話になってきたいくつかの団体の事だけお手伝いしているにすぎない。これらをつなげて冒険探検と環境教育を連携することにより、文明を転換するようなボランティア活動を作りたい。ワールドスクール（あるいはエコクラブ）の高野さんは先日皆さんに紹介した。北極探検をやっている人である。このグループには元気な女の人が多い。森とむらの会にはいつも後見団体になっていただいていた。いまは、財団法人森とむらの会・自然文化誌研究所を名乗ることを認めていただいている。ここには功成り遂げたシニアが多い。INCHはこのあたりと連合して、もう少し大きな事ができるようになってほしい。東京学芸大学環境教育実践施設ではグローブ日本の中央センターももっているの、これも含めて、地球規模で行動し、考え、秩父多摩で活動し、考えたいということである。次の5年に向けて話し合いを深めよう。

かなり硬派になってしまったが、これが20年目の、創部者の一人としてのメッセージである。

夢に生きよう。やろう、もっとでかい冒険・探検を。